

弔 辞 菱木昭八朗先生との思い出

平成15年10月22日、午後10時過ぎに設立前の法科大学院関係に関する会議を終え、タクシーで自宅に向かっている途中で、妻からの留守電に気付き、電話をしたところ、菱木先生が危篤状態となり、聖マリアンナ病院に入院しているということであった。そこで、急遽病院に駆けつけた。その時、先生は集中治療室で人工心肺装置を装着していたため、規則正しい呼吸をしているものの全く意識のない状態であった。敗血症を抑える薬と糖尿病の薬の拮抗作用の中でなんとか生への道を探ろうとしていたところであった。午前1時まで病室にいて、小康状態であるということので自宅に帰ることにした。

その後、何度か病院に見舞いに訪れたが、意識を取り戻すまでには暫く時間を必要とした。意識を取り戻してからには管が気管に挿入されていたため、話すことが出来ず、ペンをもって自分の思いを家族に伝えていたようである。その中には「宮岡に会いたい」と書かれたものがあった。この話を家族から聞き、会いに行き、ようやく話しができる先生にお目にかかることが出来た。その時まだ意識を取り戻したばかりで自分がいるのは船室かというような話しをしていることもあったが、私に会いたいと言った用件は、入院するまで翻訳していたスウェーデンの改正家族法に関する話しがしたかったからということであった。その話しを聞きながら生涯研究者であり続ける先生の姿をみた思いがした。昨年の鳳祭の最終日に病院を訪れた際に、一時帰宅されるまでになっており、先生が移られた一般病室に私が執筆した仲裁法の本と置き手紙をして帰宅した。その後、退院をしたものの遂に平成16年5月19日、菱木昭八朗先生が心不全でこの世を去った。

先生にお世話になって今日がある私として、先生との思い出を書くことで先生の学生との交流の一端を紹介することが出来ればと考えている。

初めて、菱木先生に会ったのは昭和50年6月である。当時先生は法学を担当されており、スウェーデンでの在外研究の関係で講義の開始がこの時期になった。やが

て、先生が正法会司法試験研究室の顧問となり、2年次に私が教務となったことから先生と生田校舎の3号館脇のベンチで新入生にどのような勉強をさせるべきかという話しをしたことを記憶している。この時、1年の時に基本法をざっと読むことがその後の学習に効果的ということになり、夏の課題として勁草書房出版の憲法（宮澤俊義）、民法（有泉亨）、刑法（団藤重光）を読みノートを作成させるということにした。この時の1年生に裁判官の古久保正人氏、検察官の中條隆二氏がいた。この作業が正法会改革の一步であり、その成果として私の後輩は順調に合格していくのである（私はなかなか合格しないという時期が続くのであるが）。

また、3年次のゼミでは出席しなくてもよいからということで、菱木ゼミに入ることになった。このゼミの先輩に今の妻がいた。妻に支えられて受験中から現在まで生活していることを考えると、先生のゼミ勧誘は私の人生を決定づけたことになる。結局菱木ゼミには毎回出席して、ゼミ生同士の交流は現在でも続いている。先生はゼミ生と一緒に行動することが好きであり夏期合宿などではビーナスライン完成前の美ヶ原高原美術館までのドライブは今でも語りぐさである。また、このゼミ生多数で先生のたまプラーザのご自宅を訪ねることも多かった。何度目の訪問の時か定かではないが、サイドボードの中に飾られていたナポレオンのブックを私が司法試験に合格したら祝杯用に関けるという話しになった。

卒業後も、「おい、宮岡君どうした。」と声をかけて励まして続けてくれたが、なかなか合格できず自分自身歯がゆい思いをしていた。昭和58年に受験中であるにもかかわらず結婚することになり、その報告をした時に驚かれた先生の姿は印象的であった。先生には松山の結婚式に出席して頂いたが、ゼミ時代にお世話になった奥様は他界しておられたことから仲人が出来なかったことを気にされていたようであった。

昭和62年に司法試験に合格して母と先生のお宅を訪問したときに、ブックを祝杯用という話しは実現されたのであるが、ブックの栓のコルクが乾ききっており途中で切れてしまうほどで歳月の経過を物語っていた。

合格後、一緒に研究会をしようという誘いなどをうけながら忙しさにかまけて実現しないままとなってしまったことは、心残りである。

私にとっては、かえがえのない恩師であり、菱木先生との出会いがなければ現在

の私がなかったことを考えると、菱木先生は東京における父のような存在である。
先生のご冥福を祈りつつ、筆を置くことにする。合掌。

平成16年5月25日

弁護士 宮岡 孝之